

駆除された淡水性カメ類の学校現場での活用の問題点

小賀野大一

290-0151 千葉県市原市瀬又962-40 千葉県野生生物研究会

The problems of utilization of removed freshwater turtles at school education.

By Daiichi Ogano

Chiba Prefectural Wildlife Research Society, 962-40, Semata, Ichihara, Chiba 290-0151, Japan.

東海地方以西の地域では、食用のハスや絶滅危惧種オニバスへの被害などからミシシippアカミミガメ *Trachemys scripta elegans* (以下アカミミガメ) の駆除が行われるようになってきた。また、在来のニホンイシガメ *Mauremys japonica* との雑種形成により遺伝子攪乱を起こしているクサガメ *Mauremys reevesii* も、一部の地域ではすでに回収が始まっている。今後はアカミミガメへの対応を追うようにしてイシガメの生息地からのクサガメやイシガメとの雑種の駆除も各地で増えていくことが予想される。すでに多くの個体が駆除されてきたアカミミガメの有効利用としては、堆肥や食品等としての活用が検討されてきている。さらに千葉県では印旛沼水系において特定外来生物のカミツキガメ *Chelydra serpentina* が近年では毎年1000頭近く駆除されており、今後は他県での増加も懸念されている。

学校現場では駆除された個体の活用方法として生物関連の授業での解剖実習がすぐに思いつく。実際にアカミミガメとクサガメの解剖を行ってみたところ両者ともに甲羅を取り除くのにある程度の努力が必要であった。背甲と腹甲との間をノコギリで切る方法やノミを当てて金槌で割るという新たな方法があるようだが(三根・谷口, 2012), 両方を試したところ, ある程度の力とそれなりのコツがいることが確認された。いずれの方法を使用するにせよ, 生徒実習前に甲板の継ぎ目に切れ目を入れるなどの手を加えておき甲羅をはがしやすくしておくという下準備が必要と思われた(図1)。一方, 特定外来生物として駆除の対象とされているカミツキガメの場合, 背甲と腹甲との間が狭いため(図2), 腹甲を除去する労力は比較すると少なかった。ただし, あくまでも個人的な印象だが, 解剖に立ち会った際にカミツキガメ特有の悪臭を感じ, 生徒実習にはあまり向かないように思えた。

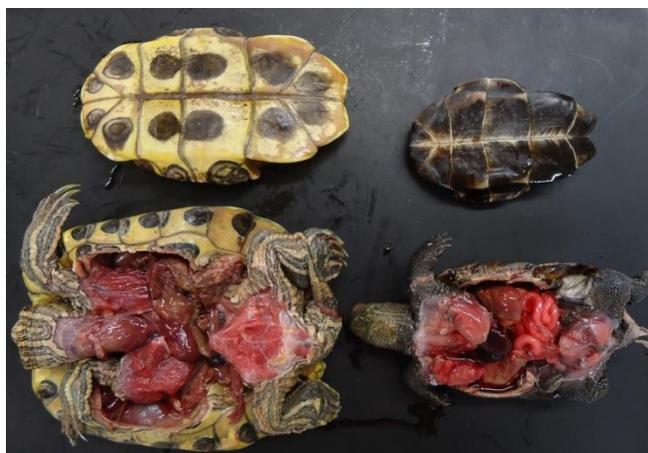


図1. アカミミガメ(左)とクサガメ(右)の解剖



図2. 菱形の腹甲を取り除いた後のカミツキガメ

一般的に各器官や器官系の特徴を理解する目的で死んだ生物を活用して解剖実習を行う際には、教材として食用のイカ、餌用マウス、ブロイラー等が学校現場で使用されている。これらの生物と総合的に比較すると、入手ルートが確立されていないこと、甲羅の除去に手間と少しの危険を伴うことなどから、カメ類は授業で利用するには適した解剖教材とはいえないと判断された。

今回、大量に駆除されたカメ類の活用として学校での解剖実習での利用を試みたが、現時点では残念ながら光明を見出すことができなかった。しかし、大量の活用は無理としても、爬虫類の特徴や甲羅の構造を学習する場合、外来種問題によるカメ類駆除の実態と関連させて用いる場合、課題研究や生物部の特別活動などの調査・研究の目的で用いる場合においては利用価値があるといえるだろう。

カミツキガメの解剖では、千葉県生物多様性センターの高山順子氏と財団法人自然環境研究センターの高橋洋生氏にお世話になりました。また、本研究の一部は、武田環境財団の研究助成により実施することができました。併せて感謝申し上げます。

引用文献

三根佳奈子・谷口真理. 2012. 淡水ガメの開腹方法の紹介. 亀楽 4:10-11.